

図画工作科における児童が持つ 世界観についての発想や表現を見取るための教員の在り方

小林 いちご
教科領域コース

1. 目的

本稿執筆者は、2024年の6月に教科領域実習Ⅱにおいて、M小学校第6学年のークラス(33名の内授業実施28名)で図画工作科の授業を6時間担当した。工作題材「くるくるクランク(6年生対象)」である。授業では、クランクの動きに合わせた装飾を工夫する製作と相互鑑賞を指導した。児童の作品の中には、作品と題名の間に、世界観のずれを感じられるものがあった。そこで、児童の製作時における作品の世界観が、製作が進むにつれてどうなっていくのかを分析することにした。本研究では、この分析をもとに、児童の作品と題名の世界観のずれが何を意味しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 問題の所在

本研究で明らかにしたい点は、具体的には以下の三点である。

- ①図画工作科の製作活動において、児童は世界観をどのように作っていくのか。
- ②図画工作科の製作活動において、児童がより広く深い世界観を作っていくためのきっかけにはどのようなものがあるのか。
- ③教員は、児童の製作活動における世界観を、どのような視点で見て、それをどう捉えるのか。また、そのような視点で見ることや捉えることには、どのような意義があるのか。

3. 実践、分析、考察

「くるくるクランク」は、クランクの仕組みを利用した工作分野の題材である。凸凹に折曲がっているクランク針金を四角い箱に通し、凸凹しているクランクに対して直角になるように竹ひごを付ける。そうすることで、クランクを回すと竹ひごが交互に上下する仕組みになっている。児童は



図1. 児童Aの作品 題名「自由な海の中」

この仕組みを理解すると共に、この動きに合わせた装飾を工夫する。主に、箱と竹ひごに装着するための装飾を製作する(図1参照、図番号は報告書と同じ)。この題材における、児童の製作終了時の作品や鑑賞ワークシートを作品と題名の世界観のずれに着目して分析する。なお、ここから世界観についての発想については、「発想」と表記する。

「①図画工作科の製作活動において、児童は世界観をどのように作っていくのか」について明らかにするため、児童A～Eの「発想」とイメージ(世界観)の移り変わりについて分析した。

表2. 授業終了時までの児童のイメージの移り変わり

時間 (計7時間)		1 時間 目	2 時間 目	3 時間 目	4 時間 目	5 時間 目	製作終了 時の作品	6 時間 目 (授業開始時)	6、7 時間 目
活動内容		製作						題名を付ける	鑑賞
	イメージの移り変わり ㊦水族館 ㊧海	※不明	㊦	㊦と㊧が流動的に混在	㊦と㊧が流動的に混在	㊧		㊦<㊧	㊧
児童 A	根拠		たくさんの種類の魚を描いていた。	シャチやトビウオ等水族館であまり見ることがない魚の製作も行っていた。	3時間目に引き続き、水族館や海の中にいるイメージを持つ魚を製作しながら、箱へ装着する際の配置に悩む様子が見られた。	わたを使用し、箱の上部に装着。 (わたで波や水しぶきを表現していたとワークシートの記述から推測。よって、より海の表現を行うためにわたを使用したのだと考察できる。)	竹ひごにイルカとシャチとトビウオが飛び跳ねる表現から、海をイメージして製作していたことが分かる。	題名 「自由な海の中」	ワークシートの記述
児童 B	イメージの移り変わり ㊦空 ㊧蝶、トンボ ㊨ヘリコプター、飛行機	※不明	㊦→㊧	㊧⇒㊨	㊨	㊨	㊦、㊨	㊦	㊦、㊨
	根拠		箱に空の装飾をしていた。	㊧の製作を終えた後、竹ひごに接着せず、㊨への製作へ移った。	㊨の製作に熱中していた。	㊨の製作を終え、竹ひごに装着していた。	2 時間目に製作していた㊧の要素は一切にない作品であった。	題名 「雲の上」	ワークシートの記述
児童 C	イメージの移り変わり ㊦水？波？ ㊧イルカ？ 魚？	※不明	㊦	㊦	㊦	㊦>㊧	㊦、㊧	㊧	㊦、㊧
	根拠		箱に波のような装飾を行っていた。	竹ひごに装着するための波の装飾の製作していた。	竹ひごの装飾の続きと箱の側面の製作を行っていた。	イルカのような魚の製作が開始され、真ん中の竹ひごに装着していた。	㊦と㊧の要素が組み合わされている作品だと分かる。	題名 「イルカのパフォーマンス」	ワークシートの記述
児童 D	イメージの移り変わり ㊦海 ㊧物語 (スイミー)	※不明	㊦	㊦+㊧	㊦<㊧	㊦<㊧	㊧	㊧	㊧
	根拠		箱に海藻やカクレクマノミ等の海の中のようなイラストを描いていた。	小さい赤い魚をたくさん製作し、箱に大きな魚になるよう装着していた。	竹ひごに付ける魚三匹を製作していた。	スイミーの物語をイメージしながら製作終了時まで装飾を行っていた。	スイミーの物語を再現したかのような作品であった。	題名 「逃げろスイミー」	ワークシートの記述
児童 E	イメージの移り変わり ㊦水族館	※不明	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
	根拠		箱にクリオネやイルカ等の水族館にいる生き物のイラストを描く。	2 時間目に引き続き箱の装飾を行っていた。	竹ひごに付けるイルカとボールの製作をしていた。	4時間目の続きを行い、製作し終わった後の装飾を竹ひごに装着していた。	作品に出てくる生き物や、竹ひごに付いているイルカの様子から水族館を表現していることが分かる。	題名 「にぎやかな水族館！！」	ワークシートの記述

※教育実習実施前(担任教諭が実施)のため不明

表2(表番号は報告書と同じ)は、本研究で児童28名中から見つけることができたイメージの移り変わり5パターンをまとめたものである。児童A～Dのようなイメージの移り変わりが起きたパターンの児童と、児童Eのようなイメージの移り変わりが起きなかったパターンの児童がいた。

次に、「②図画工作科の製作活動において、児童がより広く深い世界観を作っていくためのきっかけにはどのようなものがあるのか」について、分析と考察をした。表2の児童Aは、3、4時間目ではイメージ⑦(水族館)とイメージ④(海)が流動的であったが、5時間目では、イメージがイメージ④のみになっている。児童Aの鑑賞ワークシートの記述から、わたで波や水しぶきを海の表現の一部として使用していたことが推測できた。よって、わたを使用したことがきっかけで水族館のイメージよりも、イメージ④である海のイメージが拡大したと考えられる。

他にも、鑑賞活動では、児童同士が意見交換をできるような鑑賞ワークシートを使用した。意見交換によって、児童自身が持っていたイメージとは異なるイメージを、友人のコメントから気が付いたことでイメージが拡大した児童がいた。例えば、児童Aの作品を鑑賞した友人は、「水をわたで表現している」「水がはねているような表現」とコメントをしていた。このコメントに対して児童Aは、鑑賞ワークシートの振り返り欄に「わたが水にみえることが自分では分らなかった」と記載していた。児童Aは、ここでの「水」が海の水のことを示しているのか、水道から出る透明な水を示しているのか、あるいは海の水も水道水も全て同じ水と理解していたのか曖昧である。しかし、児童Aにとって、友人からのコメントによる「水」へのイメージに対する新たな気づきは、「水」のイメージが拡大したということであると考える。

以上をふまえて、「③教員は、児童の製作活動における世界観を、どのような視点で見て、それをどう捉えるのか。また、そのような視点で見ることや捉えることには、どのような意義があるのか」について考察した。①より、製作過程の中でイメージの移り変わりが起きている児童がいることが明らかになった。それは、製作終了後の作品だけを見ても分からない。よって、教員は製作開始時に、児童のイメージを掴むことが大切である。そのうえで、製作活動中は、製作過程と製作中の作品から、児童が最初に持っていたイメージと変化があるのかを見取る必要があると考える。この時、「発想」の転換ポイントがあったのか、まだ来ていないのかという視点で見ることで、児童の製作

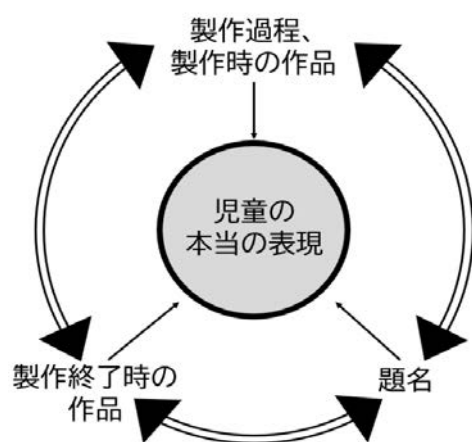


図8. 児童の本当の表現を見取るための
教師の視点

終了時の作品のイメージが掴みやすくなると同時に、児童の表現の方向性が見えてくる。つまり、児童の本当の表現を見取るためには、製作終了時の作品と題名だけでは判断することはできない。教員は、製作終了時の作品と題名を製作過程と製作時の作品を関連付けながら振り返ることで、児童の本当の表現を理解することができる。教員が児童の本当の表現を理解することで、児童の「発想」の根源を知ることができ、児童の「発想」をより広く深くするための支援ができる。

4. 結論

「①図画工作科の製作活動において、児童は世界観をどのように作っていくのか」については、児童の「発想」とイメージ(世界観)の移り変わりについて分析した結果、図画工作科の製作活動において、児童の「発想」の仕方は、複数のパターンがあることが分かった。これらの児童は、イメージが定まるタイミングによって「発想」の仕方が異なっていた。他にも、あるイメージにもう一つのイメージが加わりイメージが拡大していく「発想」のパターンもある。また、一つのイメージだけを追求していき、イメージの変化がないパターンもある。

「②図画工作科の製作活動において、児童がより広く深い世界観を作っていくためのきっかけにはどのようなものがあるのか」については、素材と意見交換の二点がきっかけになりうることが分かった。素材は、児童の「発想」が広がると同時に、イメージをより表現するためのものとして役立った。意見交換については、児童一人では気が付くことができなかった部分を、友人を通じて気づくことで、新しいイメージを構築する。すると、「発想」の広がりが生まれ、今後の図画工作科の学びに繋げることができる。

「③教員は、児童の製作活動における世界観を、どのような視点で見て、それをどう捉えるのか。また、そのような視点で見ることや捉えることには、どのような意義があるのか」については、教員は「製作過程、製作時の作品」「製作終了時の作品」「題名」に視点を置き、それぞれを関連づけて見ることで児童の本当の表現を知ることができるかと考察した。

謝辞

本論文は、実習でお世話になったM小学校の先生方、附属小学校の先生方、児童の皆様、その他お世話になった方々によって、書くことができました。この場をお借りして、御礼申し上げます。